NPO 法人岡崎がくどうの会

第 38 回あいち学童保育研究集会レポート

【クラブ】（　　あおぞら　　）　【名前】（　　花田幸奈　　）　【立場】（　指導員　）

① 午後に参加した分科会の名称をお書きください。

第（　11　）分科会　　名称（　　子どもの生きづらさと自己肯定感　　）

※午前の全体会のみに参加した場合は、全体会講演の名称をお書きください。

②全体会講演や分科会に参加して、心にのこったことや気づいたことや学んだこと、今後の実践に活かしていきたいことなど、感想もふくめてお書きください（自由記述）。

今回、私がこの分科会を選択した理由は、コロナ禍での子どもたちの生きづらさを心配する気持ちがあること、様々な活動が制限される中、子どもたちとの日々の関わりの中で自己肯定感をどのようにふくらませていけばよいのか気になったからです。

まず、自己肯定感とは「良いところを褒めて伸ばしていくことではない。子どもたちの良いところ部分ごとで褒めるのではなく、子どもたちの強いとこ、弱いとこに関わらず全部まるごとを受け止め肯定していくことだ」と仰っていました。そして、「褒める」という行為にはいくつか落とし穴がある。それは、褒める人の価値観によってその行為の良し悪しが左右されること、また「褒める」ということが時に「褒められるように良い子にしないと」といった意識につながるというお話を聞き、怖さを感じました。そして、そうならないために私たちは子どもたちにかける言葉にもう少し責任をもたなくてはいけないということを感じました。子どもたちにとって大事な放課後の時間に学童ですごしてくれてる子たちに「学校よりも少しリラックスできる場所であってほしい。無理をせず、自分らしくありのままの姿を出せるようにすごしてほしい」と私は日々考えています。

また、「自己肯定感は愛(触れ合い)でふくらむ」というお話がありました。コロナ禍で人との触れ合いが少なくなっている中、さらにはマスクで表情が伝わりづらい、見えづらい中、私たちの愛情は子どもたちへ伝わっているのだろうか…？と、ときどき不安になります。そんなコロナ禍の保育と向き合っている私たちに寄り添うような言葉を仰ってくださった「心で抱きしめてあげて」という言葉はとても心に残っています。子どもたちが「自分が自分であって大丈夫」という気持ちを感じていけるように、一人一人異なる子どもたちの姿を大切に、もっと子どもたちの“ありのまま”を受け止めて一緒にすごしていきたいと思いました。

※このレポートは、参加されたすべての保護者と指導員にご提出をお願いしています。

※文字数の制限はありません。この用紙に手書きでもかまいませんし、データでお送りいただいてもかまいません。

※〆切は 3/21（月）です。指導員に手渡し、または、こちらのアドレス okazakigakudou@yahoo.co.jp にお送りください。

※ご提出されたレポートは、当会のホームページや岡崎がくどうの会だより「よりどころ」に掲載する予定です。